

# 緑地探訪 種崎の海岸マツ林 (高知県高知市)

楠瀬雄三

エコシステムリサーチ (marukusu5@hotmail.com)

日本の海岸には飛砂防止や防潮を目的に植えられたマツ林が多く見られる。これらが本格的に植林されたのは江戸時代になってからのようで、それは江戸時代に入り農業政策の重視や農業技術の向上によって人口が増大し、燃料として山の木々を多く刈った結果、大規模な表土の流亡を招き、海に達した土砂が砂浜へ打ち寄せられて砂浜を増大させ、甚大な飛砂害をもたらしたことによる。飛砂の害が問題になるということは、陸側には守るべき人の生活圏があるということであり、たとえ飛砂があったとしても、陸側に守るべきものがなければマツ林は整備されない。つまり、マツ林の海側には飛砂の供給源たる砂浜があり、陸側には守るべき田畑や居住地などの集落がある、ということである。この砂浜、マツ林、集落の3つはセットとなって日本の海岸景観を構成する要素となっている。私たちは、この複数の環境を含む海岸景観が形成されることによる生物多様性との関係について研究している。その対象地の1つが種崎の海岸マツ林である<sup>1)</sup>。

種崎の海岸マツ林は浦戸湾の河口の東側に位置し、対岸には景勝地として有名な桂浜がある。このマツ林の面積は約8.0 haであり、中央付近を通る道路によって分断され、主に東側は県立の自然公園(種崎千松公園)として県が管理し、西側は墓地として地元の墓地組合が管理している。高知市とその周辺には種崎以外にも海岸マツ林はあるが、種崎の海岸マツ林は他と比べて面積が大きい。それが研究対象地として選んだ理由の1つである。その他に、種崎の海岸マツ林の特徴として以下の2つが挙げられるだろう。1つはマツ林を構成するマツの大きさである。1970年代にマツ枯れの被害が蔓延しはじめたころ、種崎の海岸マツ林も多くのマツが罹患し

たが、薬剤の散布、罹患木の伐採などの保護策が積極的にとられ、多くのマツが守られた。そのため、今でも樹高20 m以上で胸高直径60 cm以上の大きなマツが多く残されている。このため、種崎の海岸マツ林は県下の他の海岸マツ林と比較して、より大きなマツで構成されている。

もう1つはマツ林の生物多様性の高さである。例えば鳥類については、県下の海岸マツ林では夏季よりも冬季において種数や個体数が多くなる傾向にあり、それは種崎の海岸マツ林でも同様だが、他の海岸マツ林よりも種数や個体数が多い(楠瀬・福井 未発表)。特に冬鳥のビンズイの個体数が多いのが特徴である。当地のビンズイは人馴れしているため、間近で観察することができる。また、植物については、林床にコナミキやウマノスズクサなどが生育し、樹上にはキバナセッコクやヨウラクランなどが着生しているなど、少なくない数の絶滅危惧植物の生育地となっている。種崎の海岸マツ林では毎年5月に下草刈りが行われており、林内が適度に開けた環境になっている。このことが絶滅危惧植物の生育地として機能する要因の1つになっているのかもしれない。

今後も他の海岸マツ林を調べ比較することで種崎の海岸マツ林の生物多様性を明らかにしていきたいと思う。

## 引用文献

- 1) 楠瀬雄三・福井 亘 (2023) 高知市種崎における海岸クロマツ林とその周辺の鳥類群集, 日本緑化工学会誌, 49(1): 115-118.



写真左：種崎の海岸マツ林を上空から望む。写真中：林内の様子。写真右下：林床に咲くコナミキ。